説苑

左右田博士とその業績

『余は文化價値の獨自性の内に淋しき乍併崇高なる人格の尊嚴を仰ぎ見んと欲する。淋しき――何となれば如何なる他のものとの協同、如何なる文化の舞臺も其の意味の本質構成に窮極の素地をなさぬからである。……人間其のものは淋しい獨自のものである。人は獨り生れ、人は獨り死んで行く。』――左右田喜一郎（文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理）

南亮三郎

一

昭和二年八月十一日、此の日吾等は永久に、經濟哲學の開祖・法學博士左右田喜一郎先生を地上から喪ふたのである。

博士の重患であられたことは在京の友から屢々傳へて來たし、私へ宛てられた博士の書翰からもその容態の並々でないことは察せられた。然し、近親者への判斷は動々もすればその客觀性を失ふことを誰れもが經驗するやうに、たとひ血のつながりはないにしても學問生活の唯だ一つの導星として、夜となく、晝となく、案に向へば必ずその崇高溫雅なる容姿を想ひ出づるを常とした私は、こんなにも早く、いとも哀しむべき此の日が私共に迫つて來やうとは思はなかつた。――噫然し、博士はつひに他界せられたのである。

博士の喪は遺志に從つて發せられず、遠隔の地に在る私は四日目の朝始めてその訃を知つたのであるが、せめては今生の名殘りを惜しまむものと葬儀の日取りを問合せたところ、その日の夕方、『今日すんだ』といふ哀しい返電が着いた。――その日博士の遺骸は、僅かなる近親のみに護られて、人を避け世を忍むで横濱郊外蓮光寺の墓地に葬むられたのである。翌十五日の東京朝日は『左右田博士の愼ましい葬式』と題して、『近親、緣者、左右田家關係者集まり極めて質素に葬儀を濟ませた、葬儀中特に未亡人直子、遺子五十鈴孃のいたいけな姿が人目をひき、左右田家の愼しみ振りに涙を誘つた』と報じた。輝かしかりし生前の日に比べて、これはまた何といふ痛ましい終焉であつたらうか。まことはやんごとなき時運の推移であつたとは云ふものゝ、最後のその日までも、

鋭い學者的責任感を有つて古武士の如く清節を持されたといふことは、その間の事情を知り、博士の心境を察し得るものゝ愁腸を抉らずしておかうか。――思へば、とゞめむと欲するもとゞめ得ざる暗涙に、今もなほ私はむせぶのである。

在りし日の博士は、私如き末輩の語り盡くすべくそれは餘りに大きい存在であつた。否な恐らく、その人と業績とを、語り盡くし味はひ盡くし得る人は、今の世に數多くはないであらう。少くとも私に取つては、博士の遺されし業績を味讀し人と共にそれを語ることは、恐らく續くであらう私の、生涯に亙つての學問生活の根本的な一課題であり、又さうありたいと念願してゐる。今は唯だ此の小文に於て、博士に就いて憶ひ出づることゝその業績一斑とを誌るしとゞめて、在りし日の博士を偲び、その偉業をたゝえたいと希ふに過ぎぬ。

二

事の順序として、先づ博士の略歴を述べると、博士は明治十四年二月二十八日、左右田金作氏長男として横濱に生を享けられた。長ずるに及び東京高等商業學校に學び、明治三十七年同校專攻部を卒へらる。東京高等商業學校の卒業論文はマーカンチリズムの研究であつたと傳へ聞くが、同校

專攻部にての博士の研究主題は貨幣論を中心としての經濟學研究であつた。明治三十八年、福田德三博士編纂・經濟學經濟史論叢の第二冊として刊行された『信用劵貨幣論』は實にその所產であつて、後年の博士獨自の學問傾向と、到底餘人の及ばざるその頭腦の冴えとは、既に此の書に表明されてゐるのである。

明治三十七年專攻部を卒へられた博士は同年直ちに笈を負ふて渡歐、英國ケムブリッヂ大學に遊んでマーシャル、カンニングハム諸敎授の門を叩き、思ふところあつて翌年獨逸フライブルヒ大學に轉學、後更にチユービンゲン大學に轉じ、心ゆくばかり獨逸精神に親しまるゝと共に、一般經濟學に就いては特にカール・ヨハネス・フックス敎授に、哲學に就いては特にハインリッヒ・リッケルト敎授に夫々私淑された。後段に述べる獨逸文の三著作は此間に起稿されたものであつて、何れも當時の獨逸學界にいたき激動を與へ、同時に之れによつて自家學說の堅き素地を作られたのである。因みに右三著作中の一『貨幣と價値・論理的研究』は獨逸に於ける博士の學位請求論文であつて、『ドクトル・デア・シユターツヴキツセンシャフト』を享けられたのは明治四十二年（西歷一九〇九年）、博士二十九歲の時であつた。その後、ハイデルベルヒ、パリーの諸大學を周遊し、通じて十年、具さに歐洲文化の精髓を味ふて大正二年歸朝せられた。

歸朝後幾許もなく、嚴父金作氏死去により博士は繼いで左右田銀行頭取に就任、その煩務を鞅掌されることゝなつたが、傍はら東京高等商業學校專攻部、及び後ち東京商科大學の講師として教鞭を執り、特に研究指導に力を注がれ、後更に京都・東京兩帝國大學哲學科講師を兼務されて今日に及むだのである。是れより曩き博士は、法學博士の學位を授けられ（大正五年）、また更に貴族員議員に勅選された。尙ほ博士の事績に就いて特に附記しなければならないことは、横濱社會問題研究所を主宰して社會問題研究叢書を監修せられたこと、及び、故大西猪之介教授の遺著編纂を主唱して自から親しくその監修の任に當られたこと、是れである。

昭和二年三月、深く自から決するところあつて一切の公職より辭退せられ、爾來蟄居して只管ら固疾の療養に盡くされつゝあつたが、その効なく、つひに八月十一日午後三時、多分の天禀を抱いて長逝されたのである。行年四十七。

三

博士の幼時及び學生時代に就いては、不幸私は語るべき何ものをも知らぬ。恐らく凡ての天才に於けると同樣に幼けなき頃より博士は、常人とは異なる途を歩まれたことであらう。嘗つて福田博

士は學生時代の左右田博士を評して『學理討究の上に於て予が始めて邂逅せる抗爭の人』(1) と呼ばれたが、以つて、先輩學者に對する儀禮は堅く持せられながらも而かも眞理のあるところ寸毫も假借せられざりし博士の、眞理追求者としての眞摯なる姿の一面を描くことが出來よう。が、私の今茲に語り得る博士は、敎壇に於ける博士であり、そしてより多く指導室及び自邸に於ける博士に就いてゞある。

(1) 後掲左右田博士第一著、福田博士序文二頁

博士の風丰は端麗溫雅、見ゆるものをして畏服せしめ、深く接するものをして慈父の如き感を懷かしめた。また自から身を持せらるゝこと極めて謹嚴、坐臥進退苟くもせられず、人に接するや、自邸に於てすらも常に袴を穿たれ、門弟を送るときにさへも常に自から玄關に立たれた。これについては、いたく私共の胸をうつ博士病中の一逸話がある。それは七月下旬、日銀總裁井上準之助氏が博士の病氣見舞に訪ねられた時のことである。福田德三博士の追悼文からその一節を借りると、『當時博士の病は、旦夕を圖られざる狀に陷り、患部の苦痛は、實に堪へ難いものであつた。然るに博士は、自から病床より起き出で、洗面調髪含漱の後、衣服を改め、袴まで着用して、わざわざ、應接室まで、辛ふじて歩を運んで總裁に對面せられた』(1) といふことである。以つて博士平素

の用意の、如何に周到であつたかゞ窺はれよう。

(1) 昭和二年九月一日發行如水會々報第四十六號所載『左右田博士の逝去に際して』二頁

博士が敎壇に立たれたのは極めて稀で、一年一度の特別講義の場合だけであつたが、少數の門弟の爲めに隔週三時間、時には五六時間もぶつ通して開かれた研究指導を通じて私共の受けた感化と印象は、到底生涯に亙つて寸時も忘るゝを得ない程深く、氣高く、また門生に對せられた態度は頗る謹嚴律義であつた。博士への入門の手續は、他の多くのゼミナールに於けるとは全く異なつて、豫め課せられたる論文を提出するにあつた。カントの謂はゆる『荊棘に富んだ批判の小徑』を私共はもう、入門の第一歩から選ばされたのである。私共はそこに、玲瓏玉の如き、眞理の化身のやうな博士を見た。人としての博士の一面に私がより多く觸れたと思ふたのは、寧ろ博士のそばを離れてから後のことであつた。昨年の夏三年振りでお目にかゝつて、私は當時、學友の一人に次のやうな所感を認めて送つたことがある。

『左右田博士にお目にかゝつたのは丸三年振りでしたが、僕は今度初めて人間としての博士に會ふたやうな喜びをおぼえました。どの偉大なる學者も然うであらう如く左右田博士はその門弟に對して極めて嚴格なる態度を持せらるゝのであります。二年間ゼミナールに參じて只の一度も學問以

外の言葉を聞いたことのない僕は、その最後の日に僕を指しまねいて「小樽へ行くんですつてね、母校だからしつかりおやりなさい」と誡め給ふた言葉なかりせば、學校に於ては遂に永久に、人間としての博士の片鱗にすら觸れることなくして止んだかも知れません。が、幸にも今度の旅は僕に、學問以外の博士の生活の一面に充分觸れる機會を與へて呉れました。いつであつたか僕の或る知人は「書物を通じて得た印象はその人から受ける印象と著しく異なるものだといふことを初めて左右田博士に見た」と云ふて來たことがありましたが、僕自身も亦、科學的認識の領域を越えた全的人格の一面に觸れて、新たなる畏敬の念と今迄ではは懷き得なかつた親しみの念とをすらおぼえたのであります。』

博士はその後進を誘掖せらるゝこと頗る懇切、嘗つて土方成美教授の批評を受けられたとき態々腕車を驅つて同教授を訪ね仔細に自說を說明されたといふことは、當時學界の美談として東京朝日の傳へたところであるが、他方博士は、如何なる煩務に鞅掌せらるゝ時と雖も、喜んで後進の原稿を閱讀し、主要なる論點に一々詳察なる批評を加へられたるのみならず、細末の辭句に至るまで朱筆を加へられた。さうして博士自からモットーとし、同時に後進に向つて繰返へし與へられた警告は、論文は一年に一回にてよろし、發表の爲めに發表する勿れ、學問的良心の滿たさるゝまで、練

りに練れ、といふことであつた。博士にとつては學問は創造であり藝術であつた。博士著作の如何なる一片と雖も、博士自身の深き省察に基づかざるものあらざるが如く、後進に對しても亦た常に、渾身の力を打ち込めたる作品を要求せられた。少しく私事に渉ることを許さるゝならば、私は今迄の主要なる作物は大抵博士の校閲に俟つを常としたが、博士は何度となく、氣のすむまで改稿を命ぜられた。時に私は或る論文を、丸善の拂ひに窮してゐるので一刻も早く發表したいと窮狀を述べた。博士は『丸善の拂ひは小生立替ふべし、發表は急ぐべからず、これで完全と思ふまで練れ』と、慈愛に滿つる鞭を加へられた。私はその時、書翰を押し頂いてどんなに感泣したことであらう。また時に私は、博士の高批に基づいて或る論文を一ヶ月かゝつて改稿し、再び博士のもとに送つた。博士、私の輕擧を叱して曰く『一ヶ月位で改稿出來るやうなものならば論文にあらず』と。その後更に六ヶ月、最善の努力を盡くして三度び博士の下に送つた。博士は少しも厭はるゝことなく喜んでそれを披見せられ、更に新しい二三の論點について注意を與へられた。私はその後更に一年を經過して、稍や滿足と思ふ點まで手を加へたこと、そして如何に考ふるも最早やこれ以上考ふる能はざる旨を傳へた。その時、始めて博士は、『それでよし、見るに及ばず、發表の世話は小生がしてやる』と仰有つた。——學問述作に對するこの涙ぐましい程眞劍な態度、それは私が學

問以外に、博士から受けた最も大きい賜物であつた。

博士はその後進に對して、自から考へ、自から立つの途を敎へられた。世の多くの學者に見受けらるゝやうな親方氣分を、決して博士はその門弟に示されなかつた。然し博士は、內心窃かに、後進の身事にも勞せられた。昨年の夏私が、故大西敎授の遺稿整理について博士から招かれて上京した際、京城大學と福島高商へ近く赴任する門弟もあるといふので、在京の門弟を集めて一夕、築地の旗亭に盛宴を張つて下さつた。その時、博士の同窓である臺灣高商の武田英一校長が同席せられ、居ならぶ面々を見渡して『左右田君も仲々澤山の優れたお弟子を持つてゐますね』とお世辭を云はれたが、博士は莞爾として、慈愛に滿ちた微笑を滿面に浮べ、『これで僕もやつと安心した』と述べられた。以つて博士が平生、如何に後進の身の振方にまで心勞せられてゐたかゞ察せられよう。

私は猶ほ一つ、後進に對する博士の情誼の如何に厚いものであつたか、同時に博士の、秋霜烈日寸毫も假借せざる學問生活の半面に、如何に高潔なる純情を有たれてゐたかに就いて、世に多く知られざる博士の生活の一面を傳へねばならない。筆路おのづから『大西猪之介經濟學全集』刊行の經紀に到る。

四

私は今、右に謂へる大西全集刊行の由來經紀をどの程度まで公言していゝかに惑ふ。それは刊行の動機又は經過に絡まつて世に公表し得ざる底の何等かの陰翳があるといふ爲めではなく、それは餘りに高明熾烈なる博士の義憤と情誼とに基づけるものであつて、從つてこれをこゝに公表することは他に若干の當り障りが生ずると懸念されるが爲めである。私は將來何等かの必要の生じ來たるまでは堅く口を緘し、唯だ世人に向つて、今まで他の機會に私の幾度びも表明した如く、大西全集編纂刊行の業は一に全く、博士の、故敎授の學問に對するいたき愛惜の念と、敎授遺族への格段の情誼との、最も尊い賜物であること、從つて博士の長逝にして今一年早かりせば、今見る如き大西全集は遂に、然り恐らく永久に、世に出づる運びとはならなかつたであらうことを高調するに止どめて、博士の厚誼と心勞とに、衷心感謝の意を表したいと思ふのである。

大西全集編纂の監修者として左右田博士が事實上、どの程度まで關與せられたかに就いては、人は往々、事の眞相を問ひたゞさむと欲する。だが、其の仔細を錄することは此の小文の有つ意圖ではなく、また、百の說明も一の事實の展示に若かざるを知る私は、本年三月末、全集刊行の門出に

起つた一事變に關連して、博士の情義を世に傳へたいと思ふ。

本年二月、御大喪の直後、麹町上二番町の博士の自邸に於て、最後の編纂協議が終り、出版書肆との間に芽出度く出版契約が成立した大西全集は、翌三月、早くも世に公表せらるゝ運びとなつたが、此の喜ばしき門出に、大西全集は大いなる一つの難關に遭遇した。忘れ得もせぬ三月二十五日午後一時、博士から一通の電報が配達された。曰く『監修者名義削除を乞ふ』と。これはその當時、博士の身邊に突如として起つた一變故の爲めに、而してその事自體は決して博士一人の責任に歸すべきものならざるに拘はらず、時を移さず一切の公職より辭退し、延ひては大西全集の監修者たるよりも辭退せられたのであつた。私共は窃かに博士の心中を察しながらも、また當時既に博士自から編纂監修の業を略ぼ了し居られたる際であつたけれども、世に一度び發表せるものを取消すことの困難であり、同時に出版書肆の意氣を沮喪せしむるなきやを虞れて、幾度びとなく電報及び書信を以つて、博士の思ひとゞまられむことを哀願した。然し博士は、一方、頑としてこれに應ぜられなかつたけれども、他方、書肆の苦衷をも察して自己に代るべき人を物色し、當時既に重患であられたにも拘はらず、大西教授と深い緣故のある大阪のS、T兩博士に長文の書信を寄せて特に全集への參加を諮られた。兩博士からは、東京のU博士とも熟議の上、『コレハ矢張り左右田がや

るがよし、又よすとしても我々（S、T兩博士）がやるのは不適當だ』として斷はつて來られた(1)。寔に右兩博士の回答は、左右田博士の氣質をよく察した、最も適當なものであつた。何となれば、博士の律義なる、到底世の俗學者流と異なり、自己の名義を列ねらるゝは、眞によくよくの場合のみであつたから。

(1) 昭和二年四月十六日附、筆者宛左右田博士書翰に據る。

此の事變の後ち博士の病勢は愈々昂進して、殆んど全く病床に親しまるゝ身となつたが、而かも博士は、表面上の名義は削除するも事實上は飽くまで事業を統率し、如何なる事件にても快よく鞅掌することを約せられ、不自由なる躬をも忘れて、屢々長文を寄せて編纂者を督勵し、印刷製本より、手稿の判讀等の細末事に至るまで、編纂者の相談に應じて、專ら、大西全集の完成を期圖せられたのであつた。その事情の一端に就いては讀者は、本年十月刊行の第三卷（經濟原論下卷）の卷頭に掲げたる六月十一日附の博士の書翰を通しても、察知せらるゝであらう。

かくて大西全集は今や、博士の忽然たる逝去に依り、遂に永久にその名を表面に表はすを得ない事情に立ち至つたが、然し同時に大西全集は、その學問的生命の續く限り、左右田博士の厚き關心を後世永しへに記念し得ることゝなつたのである。嘗つては、博士の獨自の學問傾向に深く傾倒

し、いみじくも厚い敬慕を寄せらるゝところあつた故大西教授も、博士自身の手に依つてその全勞作の世に出でたことを、どんなに滿足せらるゝことであらうか。思へば、大西全集刊行の經紀の一面を語ることは、後進に對する博士の厚い情誼を語り、同時に、人間としての博士の全幅を描くことに他ならない。

五

最後に私は、左右田博士の學問業績に就いて語らねばならない。

概して云へば、博士は決して多作の方ではなかつた。それは一面、博士が日常たづさはられたる煩務に妨げられたるにも由らうが、それ以上多く私は、自から深く駄作を戒しめられたるに由ると、思ふ。然し博士の遺されし著作を、試みに今案上に積んで見ると、既刊の單行本だけでも五冊、而かもその何れの一冊、一篇と雖も、刊行當時、著大なるセンセーションを學界に與へざりしものはなく、今日と雖も、同じ分野に於てこれらの書の右に出づるものはない。次にその述作の主要なるものを年代順に掲げ、後に一括して博士の學問傾向を叙述しよう。（※印は單行本）

(1) ※信用劵貨幣論（福田德三編纂、經濟學經濟史論叢第二冊、明治三十八年刊）

(2) Die neue Knappsche Geldtheorie und das Wesen des Geldes. (Conrad's Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. 34, Heft 3 u. 5) 1906.

(3) ※Geld und Wert. Eine logische Studie. (Tübinger Inaugural-Dissertation) Tübingen 1909.

(4) ※Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze. (Tübinger staatswissenschaftliche Abhandlungen, Heft 17, herausgegeben von Carl Johannes Fuchs) Stuttgart 1911. (邦譯、勝本鼎一、經濟法則の論理的性質、大正十二年刊)

(5) ※經濟哲學の諸問題　論文集卷一（大正六年刊・大正十一年改刷）

收錄主要論文

一、思想問題として見たるサンヂカリズム――ベルグソン哲學との交渉

二、カント認識論と純理經濟學

三、經濟學認識論の若干問題

四、經濟政策の歸趣

五、經濟哲學の問題

六、未定稿價値論の一節

七、貨幣論上の限界效用學說

(6) ※文化價値と極限概念　論文集卷二（大正十一年刊）

收錄主要論文

一、價値哲學より觀たる生存權論
二、文化主義の論理
三、價値の體系
四、個別的因果律の論理
五、極限概念としての文化價値
六、合理性對非合理性の問題を通じて觀たる『極限概念の哲學』

(7) テレオロギイ考察（大正十二年一月、思想第十六號）

(8) 貨幣概念を中心として——土方教授並に坂西教授の批評に答ふ（大正十三年三月、商學研究第三卷第三號）

(9) 文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理（左右田喜一郎監修、横濱社會問題研究叢書第二篇「新カント派の社會主義觀」大正十四年刊、附錄）

(10) 西田哲學の方法に就いて——西田博士の教を乞ふ（大正十五年十月、哲學研究第十一卷第十號）

（附記）此の外に、既に發表せられたる小論文數篇、及び他界の直前、病床にて稿を起されたるものあり。それらはやがて遺稿整理の擧ある際、若き日の述作と共に世に出づることゝなるであらう。

是等の諸著を通じて略ぼ推せらるゝ博士の研究主題は、大體三段の遷移を爲してゐる。第一段は貨幣論を中心としての經濟學研究（前掲著作1、2、3）であり、第二段は理論經濟學一般の認識論的基礎付け（前掲著作4、5、8）であり、第三段は文化哲學の建設、從つて一般哲學問題への沈潛（前掲著作6、7、9、10）是れである。然しそれ等は云ふまでもなく個々別々のものではなく、題名と範圍とこそ異なれ、その取扱はれむとした問題と態度とは、處女作より晩年の作に至るまで略ぼ同じいと云へよう。否な博士に於ては、問題は常に同じであつた。そしてこれを堀りに堀つて行かれたのである。

先づ第一段の貨幣論研究に於ける博士の出發點は、處女作『信用劵貨幣論』の序文にも誌るされある如く、經濟學の『對象を一貫する根底は、少くとも今日の經濟狀態に在つては貨幣なり』(1)との強き認識に在つた。さうして之れに對する博士の問題及び態度は、此の、社會現象のうち或る意味に於て最も普遍的なる經濟現象に、その謂はゆる『根本的抽象的の解釋』又は『哲理的解釋』を與へむとするに在つた(2)。即ち博士は是等の書に於て、『從來の技術的立場を打破し、新たにカントの哲學に根底を求めた認識論よりしたる貨幣に關する純理研究を以て從來のあらゆる經濟學者を縱横無盡に論破し、別に前人未發の學理を建てんと試みた』(3)のである。

(1) 前掲第一著、序文一頁
(2) 前掲第一著、本文二頁
(3) 福田德三著、經濟學研究、明治四十二年改訂增補第四版、後編三四九—三五〇頁參照

固より右第二著『クナップの新貨幣學說と貨幣の本質』は專らクナップ說の駁擊を意圖したものであり、また第一著『信用劵貨幣論』と第三著『貨幣と價値』との間には四年以上の隔たりがあつて、その研究は一段と進境を示してゐるけれども、然しその問題、その態度は、是れ恐らく博士の終生渝はらざるところであつた。即ち、凡ゆる『經濟現象の燒點たり集中點たるべき貨幣現象』の認識は、博士をして後年の、謂はゆる貨幣概念を中心としての理論經濟學の建設に導びき、また經濟現象の科學的研究に於ける『哲理的解釋の必要』は、博士をして徐々に、一般哲學問題の研究に導びいて行つたのである。

次に第二段の、理論經濟學一般の認識論的基礎付けは、今日博士をして『經濟哲學の開祖』たるの榮譽を擔はしむるに至つたものである。これ等の著作に於ける博士の問題は、恰かもカントが從來の自然科學に對して、未だ曾つて存せざりし根本問題——『如何にして先天的綜合判斷は可能なりや』,Wie sind synthetische Urteile a priori möglich?"——を提出した如く、『如何にして經濟學的認識は先天的に可能なりや』との一問に歸する。惟ふに經濟學は、上下二つの限界に於て哲學と

交渉する。上位の限界とは人類の經濟生活の意味如何、即ち經濟生活は抑も如何なる意味を有し、全人間生活の内部に於て如何なる地位を占むるかといふ問題であり、下位の限界とは、如何にして經濟學的認識一般は成立するか、即ち如何にして經濟學的諸概念は構成され、如何にして經濟學は學として可能となるかの問題である。左右田博士の問題は畢竟、此の二つの問題に歸するのであつて、第二の問題より出發して漸次、第一の、最も深奥なる問題に移り行かれたのである。――吾等は其處に、學界未拓の分野に雄々しくも獨り鋤を打ち加へつゝあつた、開拓者としての博士の勇姿を見る。

尤も前掲第四著『經濟法則の論理的性質』は從來學者の求め來たつた殆んど一切の經濟法則は、その論理的性質上、自然科學的・技術的法則に屬するものであつて、かゝる法則の樹立は經濟學獨自の分野に屬せず、またその本質に反するものなる所以を指摘せられたるに在り、第五著『經濟哲學の諸問題』は系統的著作に屬せず、夫々必要に應じてものされたる論文集ではあるが、而かも歸するところ問題は一であつて、『何が經濟學的概念構成一般の嚮導觀念なりや』"Was ist die leitende Idee der wirtschaftlichen Begriffsbildung überhaupt?"とふこと、詳言すれば、『經濟學全體を貫通して其の概念構成の歸趣を示す一嚮導觀念あることを要すとの意味に於て、其の學の概念

構成に謂はゞ經驗的なる乍併先天的要素を要す』といふこと(2)に在つて、その謂ふところの嚮導觀念、又は經濟學的諸概念の論理的アプリオリとして、博士は貨幣概念を拉し來たられたのである。かくて博士は之れに依つて、一方在來の經濟學を根底より覆へし、又は少くともその認識論的反省を促し、他方自から歴史的文化科學としての經濟學の、從ふべき方法、向ふべき歸趣を闡明せられたのである。

(1) 前掲第四著、原本七六頁、邦譯本一四六頁

(2) 前掲第五著、改刷初版六三頁

最後に第三段に於ける博士の關心事は、右第二段の諸著に展示せられたる哲學問題を深化し、同時に自家の哲學思想を體系化するに在つた。試みに之れを類別すると、第六著『文化價値と極限概念』中の『價値の體系』は、私の前に謂へる經濟哲學上の上限の問題を取扱ふて經濟生活又は一般に人間生活の意味如何を討尋し、兼ねて自家哲學體系の片鱗を示したものであり(1)、同著中『文化主義の論理』『價値哲學より觀たる生存權論』、及び第九著『文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理』は、內面的には『價値の體系』と同じ問題を取扱ひながらも、外に出でゝ社會主義的又は社會政策的諸思想を檢討し、社會思想の批判又は規準としての社會哲學を究明したものであり、第六

著中の『個別的因果律の論理』は如上文化哲學又は價値哲學の窮極の問題を摘發して、その據つて立つ根據を研覈したものであり、而して同著中最も深邃なる思想を開展せる『極限概念としての文化價値』『合理性對非合理性の問題を通じて觀たる極限概念の哲學』、及び第七著『テレオロギイ考察』は是れ恐らく、カントの批判哲學に立脚するものゝ、窮め得る限りを窮め盡くしたものであらう。

(1) これを中心としての筆者自身の貧しい研究に就いては本誌所載拙稿『社會哲學の基本問題——社會對個人の問題を通じての左右田哲學への一省察』を併せ讀まれむことを望む。尚、此の點に關する博士の述作を通じての系統的紹述は、商學研究、昭和二年十月、第七卷第一號所載、金子鷹之助稿『左右田博士の「協同體倫理」』參照。

尤も博士自身に取つては、向後に殘されたる幾多の問題があつたであらうし、また自から深く省察を重ねらるゝに從ふて、論じて而かも盡くさずと思惟せられたる個所もあつたであらう。博士自から之れを述懷して『如何なる學問研究者も彼が嚴肅なる學的良心を有する限り自からの研究する當面の問題について假令一段落を告げ得たと思ふときでも、常に其の内には更に解決を要すと思惟する根本問題の殘されて居ることを思はぬものがあるであらうか』(1) と誌るされた。かくて『如何なる研究と雖も、自足完了の狀態に至るといふことを以て常に一個の永久に實現することを得ざる理念とせざるを得ないもの』であるとは云へ、類ひ稀なる思索力と獨創力とを有たれたる博士がそ

の晩年を完ふせずして、恐らくは博士自身に取つては未完成と思惟せられたる、而してより多く今後に期待さるゝところあつた幾多の業績を遺して長逝せられたるは、日本經濟學界の爲めに、然り恐らくは是れ以上に、哀しむべきことはないであらう。

(1) 前掲第六著、序文一頁

さりながら博士の述作は、たとひ竟に體系化さるゝことなくして已むだとは云へ、その勞作の如何なる一片と雖も名匠の手に成る藝術作品の趣きあらざるものはなく、その獨自の境地、その深くして廣き哲學思想は永しへに、斯學の研鑽に從ふものゝ導星となり、かくてその業績は永劫に傳へらるゝことであらう。

六

輝かしき博士の業績一般を回顧して、想ひは再び、いとも淋しきその晩年と終焉とに到る。――博士の淋しき乍然嚴かなる終焉は、奇しくも博士の學問そのものゝ相でもあつた。博士は夙に、その運命を語つて曰ふた。

『創造者價値は儼として其自身に固有の內面的意義を語るものでありながら、文化價値實現の過

程に入り得るまでは――幾多の歳月、幾多の曲折が其の間に横はることであらう――纔かに獨自完了的意味の内に自から滿足するに止まらねばならぬ。而して更に進むでは此の獨自完了的の意味の裡に滿足するに止まること未來永恒に亙らねばならぬこともあり得べきである。茲に創造者價値の悲哀があり而して又他面其の尊嚴がある。』(1)

(1) 前掲第六著、一五五――一五六頁

かくて私は、博士の業績の世に容れられざること、世に解せられざることを以つて、却つて其處に、一世の頭腦のみの有する――『圓滿具足完了の意味の裡に自からを統一して他に求むるなきの偉大と尊嚴と』(1)を想はざるを得ない。孤獨は創造者の一面である。同時にその業績は、永恒に亙つての光輝と歡喜とを、それ自からに包む。若し夫れ後世、何れの日か何れの國か、唯だ一人の知己を世に見出さるゝことあり得べしとせば、博士は、限りなき喜悅と滿足とを覺えらるゝことであらう。

(1) 前掲第六著、一五六――一五七頁

博士の他界後、或は坊間に曰ふものあり、『左右田博士は純然たるブルジョア學者であつた』『左右田博士の經濟哲學は資本主義經濟學の頂點を形成する』『左右田哲學の止揚はその死とゝもに來

た』と。此の種の、曲學阿世の妄評家に對しては、私は唯だ、カントの淋しくも云へる、而して博士亦た感を同じうせらるゝであらう言葉——

„Man wird sie [nämlich der Kritik der reinen Vernunft] unrichtig beurteilen, weil man sie nicht versteht; man wird sie nicht verstehen, weil man das Buch zwar durchzublättern, aber nicht durchzudenken Lust hat.“ (Kants Prolegomena, hrsg. von Vorländer, 6. Aufl. Leipzig 1920, S. 8.)

といふを送つて、疑ふもの先づ虚心坦懷、博士の書を味讀し『潜心熟考するの興味』を有つに至らむことをすゝめ、さうして、眞の意味に於ける孤獨の行者、然り、如何なる他のものとの協同、如何なる文化の舞臺もそれ自からとしては求められざりし左右田博士と共に、心靜かに——人のざわめき、世のどよめきを超えて、私は聲を合はせて唱へよう。

『余は文化價値の獨自性の内に淋しき乍併崇高なる人格の尊嚴を仰ぎ見んと欲する！』

——昭和二年十一月五日深更、遙かに博士のおくつきを拜しつゝ認めおはる。——